

人種と植民地主義

1. 植民地主義的状况と人種

- ・フランツ・ファノン『黒い皮膚 白い仮面』

「ママ、見て、ニグロだよ、ぼくこわい！」

ファノン：アルジェリア出身、黒い皮膚のフランス人／知的エリート（精神科医）

フランス人の男の子が、黒い皮膚をもつ彼にまなざしを向ける

⇒仮面に過ぎなかった「白さ」

- ・ファノンの「愕然」

知的エリートとして家庭内ではニグロの真似をするなど教育されてきたが、外では黒人と見なされる現実

知的エリートとして、偏見を持つ子供を笑えなかったという事実

黒人＝醜いという価値観を自分自身で内在化させていた

黒人としてのアイデンティティを自ら抑圧している

*人種の植民地化

自分自身で人種に基づく劣等的な価値観を内在化してしまう

特権、経済的地位の問題以上に恐ろしい問題

- ・サルトル『植民地の問題』より「黒いオルフェ」

ハイチの詩人の嘆き

「自分の使う言葉にも、習慣にも／応えようとしないこの執拗な心、／その心の上に かがすがいのように、／借り物の感情とヨーロッパの習慣が、／喰いこんでいる。君たちに感じられるか、／セネガルからやって来たこの心を、／フランスの言葉で手なづけるといふ／たとえようのないこの苦しみとこの絶望が。」

*植民地的状况があまりにも続くと反抗する気力さえはぎとられる。

⇒心理的な意味での植民地化

- ・言葉に浸透する人種主義

植民地化の言語に潜む白が善（潔癖）、黒が悪という二項対立の価値観

黒と白：原住民と植民者

「ニグロは潔白を意味するのに「雪のように白い」と言うように学ぶだろう」

「眼差しの、心の、罪の、黒さについて語ることを学ぶだろう」

⇒植民地化の被支配者層は「口を開くや否や彼は自分を責めたてることになる」

あらゆる言語の中に白が善で黒が悪であるという価値観の浸透、白人の教師から
黒人は学んでゆく

・反人種主義で対抗すべきというサルトルの主張

「この人種主義に反対する人種主義こそ、人種差の撤廃に通じ得る唯一の道である。」

人種主義に立ち向かう道は、黒人性の優越性を唱える人種主義しか道がない

⇒「抵抗の人種」

黒人が黒人であることを誇れるよう目指す

最も重要なこととして心の解放を叫ぶ

→デュ・ボイスら二十世紀の黒人指導者・知識人

・映画「マルコム X」

白人になろうとする主人公が、刑務所で白と黒の辞書の定義を他の黒人「ブラザー」から教わる⇒転向

*植民地的状況における人種

日々どの言葉を発してもその束縛から自由がない

言葉自体が価値感を含んでいる、そこからの解放を目指す「抵抗の人種」

2. ヨーロッパ植民地主義の負の拡大

・チャンナ論文

近代がインドに人種概念とカーストをもたらした：二者は切っても切れない関係、本来ゆるやかな階層であったが、植民地化によって厳しい境界線をもつカースト制度にインド内での政治的エリート、知識人が、いかにイギリスの支配者と結託してきたか

参考) 井野瀬論文

*対立軸はインド対イギリス帝国ではなく、上流階級の人々の間では価値観・美意識が共有されていた

*インドにおける上流階級の生活が双方向的にイギリスの上流階級の生活にも流れる⇒人種によって縦割りになるのではなく、階級が交錯していることにも注意

- ・栗本論文

ツチとフツの「民族浄化」：植民地的状況中での人種概念の吸収が原因

創世記の第9章 ノアの三人の息子たちにおけるセムとハム

セムの優越と呪われた人の子孫としてのハム／奴隷となるべき人種

セム→やがて鼻筋の通った顔立ち、北東アフリカの人を意味する語に分類

セリグマンの本におけるアフリカの分類

すぐれた人種、劣った人種を記し多大な影響力

ハム仮説 (p.366) が学問的な問題を超えて現実の政治にも影響を及ぼしている

旧約聖書にある建国の由来 (フツがハム系のツチ族を農耕民を征服する) :

ルワンダ人自身がその仮説を吸収し、独立後の政治史を決定づける

現在のアフリカ中でのツチとフツの紛争

⇒ ヨーロッパで作られた概念が引き起こしている

【図版紹介】

図.1 1757年 ハーパーズウィークリーの挿絵

- ・「ナチュラリスト」として描かれる「野蛮」な黒人

- ・猿と並べられる黒人像

- ・顔面角の測定と人種概念

図.2 1936年アリア人種との差異を探るユダヤ人の計測

- ・アイカラーイグザミネーション

- ・頭骨の長さを測る

- ・鼻の幅「科学的」な検証

: ホロコーストの前の状況

参考) ワシントン ホロコースト記念博物館

- ・人体実験プロセスの写真

3. アジアと植民地的状況

- ・坂元ひろ子論文を用いた石川先生の授業

中国中での人種主義はヨーロッパの理論の転用によって生じている

- ・日本の植民地主義と人種

日本の屈折

p.45 文明開化後の人種改良論 (結婚によって体格が変わる／改良するのが良い)

日露戦争後欧米の脅威としての日本「黄禍論」→日本人移民の排斥が激しくなる

人種差別の糾弾の失敗

⇒ベルサイユ条約に人種差別撤廃条項を盛り込むことができなかった
*眼がヨーロッパに向いていたのが屈折

・「抵抗の人種」へ

欧米の人種差別的な政策、アジアへの侵略を守るリーダーとしてのプレゼンスを高める

⇒大東亜共栄圏

ヨーロッパの人種の価値観を一度内在化させたあと、「アジア人」として立ち向かう

※だがアジアの中ではヒエラルキーのトップに

参考) ホーシ 白人至上主義が結果的に日本を追い込んだ

／有色人種の連帯を訴えて日本が侵略を始める

・中国における同質の展開

社会進化論の強い影響 (アイヌ、先住インディアンのようになることは避けねばならない)

白種に対抗し得る黄種

「黄帝」・イエローエンペラー神話の発見

→イエローエンペラーの地を引く我々がイエローレイスのリーダー、アジアのトップになるべき

⇒中国版の「抵抗の人種」

*欧米のヒエラルキーを吸収したのちに自分をトップに、日本と共通

・日本の内部における人種問題

アイヌと琉球 明治以後 双方は「境界線上の人々」他者化 人種分類では下位とする
説 「本土の人間と同じではない」

しかし琉球の方が、アジアとの交易において地政学的に重要⇒

→包摂しつつも大文字の **Race** を当てはめる、日本の中に包み込みながらも微妙に差異化する

アイヌ⇒琉球より遠い距離感：外交的脅威は、琉球ほどでなかった。

*地政学によって、包摂・差異化の度合いが違うことに注意

Q学生からの質問

Q. なぜアメリカ (ワシントン DC) にホロコーストの記念館があるのですか？

A. アメリカの中でのユダヤ人の影響力はある意味かなり強い。知識人にもユダヤ人が多い。ユダヤ人は今でも偏見をもたれているが、アメリカ社会のある部分ではエリート層を占めている。世界的に見ても、ユダヤ系の中で、アメリカのユダヤ人の財力が強

いという点もある（その寄付により賄われている）。スミソニアンに近くに置いたのは、美術館を訪れる観光客が多く、世界的なプレゼンスが強いため。今現在、その隣にチャイニーズ・ホロコースト記念館建設の構想がある。南京大虐殺に関するもの。